田村志津枝さん コラム

PICK UP MOVIE

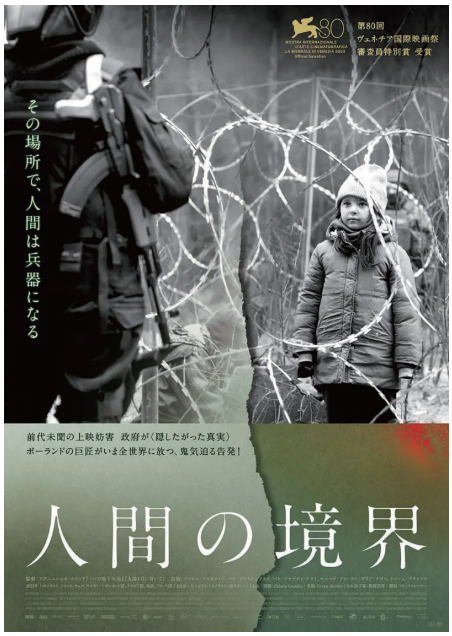
『人間の境界』

［2023年／ポーランド、フランス、チェコ、ベルギー／
ポーランド語、アラビア語、英語、フランス語／152分］G
監督：アグニエシュカ・ホランド
出演：ジャラル・アルタウィル、マヤ・オスタシェフスカ

第80回ベネチア国際映画祭 審査員特別賞 受賞

©2023 Metro Lato Sp. z o.o., Blick Productions SAS, Marlene Film Production s.r.o., Beluga Tree SA, Canal+ Polska S.A., dFlights Sp. z o.o., Česká televize, Mazovia Institute of Culture

7/19～



難民が問いかける ヨーロッパの深い闇

世界の難民の数は日本の人口に匹敵する1億2000万を超え、そのうち4割が子どもだという。このたぐいの話に、私たちは無力感にさいなまれつつ耳を塞いではいないか。

それを果敢に取り上げたのが、この作品だ。2021年秋、監督が暮らすポーランドと東隣のベラルーシとの国境地帯の森に難民が増えはじめた。彼らはシリア、アフガニスタン、イエメン、コンゴなどから、国境検査不要と聞いてここを目指してきた。ところが実は彼らはここで、EUとベラルーシの政治的駆け引きの道具とされ、飲み水すら与えられずにベラルーシとポーランドのあいだをただ繰り返し行き来させられたのだ。命からがら故国を離れてヨーロッパにたどり着くや、もっと劣悪な状況に投げ込まれた彼らの姿には言葉もない。

画面はドキュメンタリーのような迫力だが、この作品はフィクションだ。ヨーロッパで安全で自由な生活をと願っていた彼らが、期待とはまったく裏腹の、人間扱いさえされない残虐な仕打ちを受けるのはなぜか。彼らの物語を多角的に十全に語るために、監督は周到に構成を練った。そして難民経験のある俳優を採用し、実際に起きた事柄を詳細に調査して脚本に取り入れている。

難民のなかのシリア人家族が描かれる。国境警備隊による容赦ない暴力のもとで、何とか助け合って生き抜こうとする。だが飢えと寒さと絶望に苦しめられ、一人また一人と家族を失っていく。

国境警備隊員の若者も描かれる。家族に対しては思いやりのある自分が、命令とはいえ難民を死に追いやる仕事を毎日していることに、ふと疑問を抱く一瞬がある。

難民を救おうとする活動家や近隣住民も描かれる。ポーランド政府は、国境地帯を立ち入り禁止にして、難民に関する報道を規制し、彼らへの人道的・医療的援助も打ち切ってしまった。大半の国民がこれに同調するなかで、地元住民や人権活動家らは危険を冒して難民の救済に乗り出していく。

監督は群像劇のなかで、さまざまな立場の人の思いや体験を丁寧に描いていく。そこであぶり出されたのは、ヨーロッパの二面性だ。民主主義・人権・平等を高らか標榜するヨーロッパは、その実、利己主義や憎悪・人種差別の発祥地でもある。エピローグで描かれるポーランド国境に押し寄せたウクライナからの難民の逸話が、それを如実に語っている。人間の中には善と悪の潜在的可能性が半々にある、と監督は考えているという。だからこそ、なんとか善を育てたいとの望みをこの作品に込めたに違いない。

プロフィール
田村志津枝
：ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた　1977 年にファスビンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオシェンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。